

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 26 日現在

機関番号：12703

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25284094

研究課題名(和文) 海外における日本語韻律指導の実践と普及

研究課題名(英文) Practice and Expansion of Japanese Prosody Education Overseas

研究代表者

磯村 一弘 (ISOMURA, KAZUHIRO)

政策研究大学院大学・政策研究科・非常勤講師

研究者番号：00401729

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,600,000円

研究成果の概要(和文)：海外の日本語教師を対象としたアンケート調査から、海外の教育現場における韻律指導は散発的な指導が主で、特にアクセントに関して体系的指導が行われていない現状が浮かび上がった。学習者の音声の分析からは、韻律情報が何もない状態では学習者の発音は不自然なものとなるが、韻律情報を見ながらリピートさせると自然な発音になること、また韻律情報があるだけでもある程度発音が向上するという傾向が明らかになった。このことから、日本語学習者はアクセント型の違いを聞き取り、産出できる可能性があること、またアクセントの記号という韻律情報が視覚的に与えられるだけでも、発音の自然さを向上させる可能性があることが示された。

研究成果の概要(英文)：A survey via questionnaire for Japanese teachers shows that the method of teaching Japanese prosody in classrooms overseas is mainly ad hoc; systematic instruction is limited, especially in regards to the Japanese word accent. The experimental study of Japanese learners' pronunciation from different countries demonstrated that without any information for word accent their prosody was unnatural, but they could produce correct Japanese prosody when they repeat native speaker's pronunciation while seeing accent marks. Moreover, they could produce, by themselves, more appropriate prosody even if they only see the accent marks. This means that most Japanese learners have the potential to differentiate Japanese accent patterns and produce them correctly. Even if students only have visual information for Japanese prosody, such as accent marks, they can improve their pronunciation.

研究分野：日本語音声教育

キーワード：音声教育 韻律 日本語教育 発音 学習ストラテジー

1. 研究開始当初の背景

日本語非母語話者が日本語を用いてコミュニケーションする場面は、国内外を問わず近年ますます日常的になってきており、日本語教育の目的としても「実際のコミュニケーション場面における課題遂行」が重視されるようになってきた。口頭のコミュニケーションにおいては音声の果たす役割が大きいことから、日本語学習者が日本語で円滑なコミュニケーションを行うためには、学習者ができるだけ自然な日本語の発音を習得できるような環境を整備することが、日本語教育における重要な課題の一つとなっている。

こうした背景から、非母語話者の日本語音声についての研究も増えてきており、特に最近の成果としては、自然な日本語の発音のためには文全体の「韻律」の役割が大きいことが指摘されている。こうした研究成果を具体的に取り入れた韻律練習のための教材もいくつか発表されてきた。

以上のように、日本語音声教育の韻律の重要性が指摘され、具体的な韻律指導法が成果として得られてきたにもかかわらず、では日本語学習者の発音が向上してきたのかと問われれば、まだまだ課題が残っていると言わざるを得ない。この理由の一つとして考えられるのは、日本で発表される発音練習教材は現状では日本に来た留学生等を中心に使用されるのが主であるため、その対象者の発音は既にある程度固定化してしまっているという点である。

アクセントの学習を含めた日本語韻律教育は学習初期段階からの指導が重要であり、かつ日本語学習者の大多数が海外で日本語学習を始めることを考慮すれば、国内にいる学習者の韻律を研究し、練習法を提供するだけでは限界がある。世界の日本語学習者が日本語の自然な韻律を見につけ、日本語で円滑なコミュニケーションを遂行できる環境を整備するためには、海外における日本語韻律教育を改革することなしには実現不可能であるという結論に達した。海外の日本語教育現場での韻律教育の現状を把握し、そこで実行可能な韻律教育の方法を提案し、実践、普及していくことが必要不可欠であると言える。

2. 研究の目的

当研究の目的として、以下を明らかにすることを旨とする。

(1) 海外の日本語教育現場における、韻律指導の現状と課題の把握

海外の日本語教育現場では、日本語の韻律に関して何がどのくらい教えられているのか、どのような方法が採られているのか、地域ごとに違いはあるのかについて調査を行い、海外の日本語韻律指導の現状と課題を把

握する。

(2) 海外の日本語学習者の韻律上の問題点の把握

海外の学習者の音声を収集し、その韻律上の問題点を把握する。特に国内ではデータが得られにくい初期段階の学習者を中心に行う。またこれらの問題点への韻律指導の影響を調査することで、海外の現場における韻律指導法の検討に生かす。

(3) 海外における効果的な日本語韻律指導法の研究と提案

上記(1)(2)の結果を踏まえた上で、海外の日本語教育現場で学習者が日本語の韻律を身につけるためには、どの段階でどのような教育が必要なのかを検討し、海外の現場で初期段階から導入可能な効果的な韻律指導の具体的な実践法を考える。また必要に応じて、これらの教授法を実践する目的の教材を作成する。最終的には、研究協力者の協力を得ながら海外の現場において、上記の指導法を実践し、その効果を検証する。

以上によって、世界の日本語教育における初期段階からの韻律指導の普及を目指し、日本語音声教育の改革に繋げる。

3. 研究の方法

本研究は、上記「研究の目的」で挙げた3点の課題、海外の日本語教育機関における韻律指導の現状と課題の把握、海外の日本語学習者の韻律上の問題点の把握、海外における効果的な韻律指導法の研究と提案を、4年計画で行なうものである。は、海外の教師を広く対象としたアンケート調査を行う。では、調査対象となった海外の機関において、初級日本語学習者の音声を収録し、分析することで学習上の問題点を抽出する。

は、当該地域の研究協力者とともに、計11カ国で順次行なう。は、以上の調査・分析結果を踏まえつつ、国内外の日本語教育現場で実践を行い、効果について検証を行なう。

4. 研究成果

(1) 海外における日本語韻律指導の現状調査

海外の日本語教育現場における音声教育の現状に関するアンケート調査を行った。海外の教師を対象に、WEBおよび質問紙より、大規模アンケート調査を行い、世界の40以上の国、地域から約650件の回答を得た。その結果から、海外の教育現場における韻律の指導は、誤った発音を直す、学生に繰り返し言わせるなどの散発的な指導が主で、特にアクセントに関しては、単語ごとのアクセントの意識化や、アクセント記号の使用といった

視覚に訴える指導等は少なく、体系的指導が行われていない現状が浮かび上がった。

ただし、中国は例外であり、教材にアクセント記号を付与するのが一般的であるなど、アクセント教育が行われていることがわかった。

国や地域ごとの傾向の違いには、日本語音声に関する研修受講率の地域ごとの違い、勤務先の学習機関、教師のピリーフが指導内容なども影響を与えている可能性が示唆された。

海外における日本語韻律教育の現状を考慮すると、海外においても、日本語アクセントの存在を意識化したうえで、教材にアクセント記号を付与するなど、日本語の韻律を体系的に継続的に学んでいけるような環境を整備することが今後必要であることが指摘できる。

(2) 日本語アクセント実現の傾向調査とアクセント記号の効果の検証

海外における日本語韻律教育整備のための基礎研究として、世界の異なる言語を母語とする初級日本語学習者を対象として、日本語アクセント実現の傾向を把握するとともに、教材等にアクセント記号を示すことでどのような影響があるかを調査した。本研究では、ドイツ語話者、スワヒリ語話者、イタリア語話者、スペイン語話者、タイ語話者、ベトナム語話者、英語話者、中国語話者に対して読み上げ調査を実施し、データを分析した。読み上げは、1~4拍の語で、各アクセント型ごとに3語ずつ、計42語のリストを用いて行った。それぞれの単語を「~です。」の文に入れ、次のタスク ~ の三種類のタスクで読んでもらい、これを録音した。

タスク : アクセント記号が何も書かれていない状態で読み上げる。

タスク : 単語にアクセント核の記号を示したものを見せ、正解の音声を聞いた後、リピートして発音する。

タスク : 音声を聞かず、アクセント記号だけを見て自力で発音する。

その結果、以下のことが明らかになった。

タスク は、アクセント記号が何も書かれていない状態での読み上げであり、この段階では、母語の影響が強く表れた。

タスク で、単語にアクセント核の記号を示したものを見せ、正解の音声を聞いた後にリピートして発音してもらった場合、正解率は大幅に上がった。学習者はアクセントの違いを音声で聞き分けることができ、かつリピートであれば適切なアクセントで発音できることが示された。

タスク では正解の音声を聞かず、アクセント記号だけを見て自力で発音してもらった結果、タスク と比べて正解率は下がるも

の、タスク より高い正答率であった。記号を示すだけでも学習者のアクセントの正用率が向上することが示された。

以上のことから、学習初期段階でアクセント記号を示すことは、母語の韻律の影響から脱却し、より自然な日本語の韻律を実現するために、効果があることがわかった。

(3) 日本語音声における効果的な韻律指導法の提案と効果の検証

日本語音声における効果的な韻律指導法の提案と効果の検証を行うため、国内外の現場において、韻律教育の実践を行い、分析した。具体的には、シャドーイングの自律学習、演劇活動における発音の自己・相互評価、ラジオ番組制作における発音のループリック評価などであった。いずれの実践においても、学習者が韻律を意識化し、各自で目標を明確にし、モチベーションを高めることが重要であることを確認した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計23件)

中川千恵子・磯村一弘・林良子、発音の評価と学習/指導方法 自律した学習者を目指して、2015年度メキシコ教師会紀要、2017、102-107

阿部新・磯村一弘・中川千恵子・林良子・松田真希子、欧州における日本語音声教育事情 教師を対象としたアンケートの結果から、ヨーロッパ日本語教育、査読有、21、2017、436-437

吳麗楠・磯村一弘・波多野博顕・金村久美・松田真希子、JFL環境下での発音学習ストラテジー使用と発音習得 中国の大学で学ぶ日本語学習者を対象に、音声研究、査読有、第20巻第1号、2016、6-15

金村久美、留学生と教員の対話における理解とその要因、人文科学論叢、No.95、2016、39-50

阿部新・嵐洋子・須藤潤、日本語音声教育の方向性の探索 音声教育に対する日本語教師のピリーフの自由回答をデータとして、宇佐美洋編『「評価」を持って街に出よう 「教えたこと・学んだことの評価」という発想を超えて』、2016、270-290

王睿来・青山恭子・山本弥生・林良子、日本人高校生の中国語声調の知覚：知識との関係に着目して、『日本語音声コミュニケーション』、査読有、第4号、2015、1-22

Rongna A, Ryoko Hayashi, Tatsuya Kitamura, Crucial Prosodic Features in Japanese Learners' Pronunciation: Evidence from Naturalness Judgments of Synthetic Speech、『音声研究』、査読有、第

19 卷第 3 号、2015、37-42

磯村一弘、音声分析ソフト PRAAT を用いた日本語韻律指導の実践、The 6th International Conference on Computer Assisted Systems for Teaching & Learning Japanese (CASTEL/J) Proceedings、2015、73-76

阿栄娜・林良子、日本語学習者によるアクセントの意識化を伴う発音訓練の効果、研究集会「日本語音声コミュニケーション研究のこれまでとこれから」論文予稿集、2015、62

波多野博顕・宋晨超・多胡夏純・松田真希子・石井カルロス寿憲、日本語・中国語母語話者による日本語朗読音声の文節型アクセント判定方法の検討、研究集会「日本語音声コミュニケーション研究のこれまでとこれから」論文予稿集、2015、61

松田真希子、パラ言語としての文字音声コミュニケーション、研究集会「日本語音声コミュニケーション研究のこれまでとこれから」論文予稿集、2015、50-54

金村久美、日本語文イントネーション指導のシラバスと実践例、研究集会「日本語音声コミュニケーション研究のこれまでとこれから」論文予稿集、2015、55-60

王睿来・青山恭子・山本弥生・林良子、中国語声調の知識と知覚の関係 日本人高校生を対象として、研究集会「日本語音声コミュニケーション研究のこれまでとこれから」、2015、17-22

中川千恵子、日本語の韻律研究と指導法のこれまでとこれから-実践例を挙げながら、研究集会「日本語音声コミュニケーション研究のこれまでとこれから」論文予稿集、2015、1-5

宮永愛子・松田真希子、聞き手配慮要素からみた超級日本語話者の発話の特徴、日本語 / 日本語教育研究、5、2014、1-17

中川千恵子・中山由佳、演劇プロジェクト授業における音声指導を通じた文化の学び、ヨーロッパ日本語教育、査読有、19、2014、191-196

波多野博顕・石井カルロス寿憲・松田真希子、日本語朗読音声を対象にしたアクセント型自動判定方法の検討、日本音響学会 2014 年秋季研究発表会講演論集、2014、363-364

林良子・吉田夏也・磯村一弘・上山素子、スワヒリ語・イタリア語・ドイツ語を母語とする日本語学習者による語アクセントの生成、日本音響学会 2014 年秋季研究発表会講演論集、2014、485-486

林良子、キャラクタと韻律の結びつき 日本語学習者における韻律の習得を中心に、Proceedings of International Conference: Context-based Spoken Japanese Language, University of Bordeaux Montaigne、2014、11-15

磯村一弘、アフリカ地域における日本語音声教育事情調査および学習者データの収集、東アフリカ日本語教育、1、2014、287-291

品と動画制作を通して、ヨーロッパ日本語教育、査読有、18、2013、277-282

②林良子・磯村一弘、ドイツ語を母語とする日本語学習者の韻律の特徴とその習得、Japanisch als Fremdsprache、査読有、4、2014、86-95

②林良子・国村千代・金田純平、異文化理解と協働を目指した遠隔教育の実践 共同作品と動画制作を通して、ヨーロッパ日本語教育、査読有、18、2013、277-282

③阿栄娜・林良子・北村達也、日本語学習者の音声の韻律変換が自然性評価に与える影響、日本音響学会 2013 年秋季研究発表会講演論集、2013、425-426

〔学会発表〕(計 44 件)

塩田雄大・磯村一弘・峯松信明・林良子、日本語アクセント観のパラダイムシフト - 高低から下り目へ -、外国語発音習得研究会第 6 回研究集会、2016 年 12 月 23 日、広島修道大学(広島県広島市)

王睿来・林良子・磯村一弘・新井潤、中国語母語話者による日本語名詞アクセントの産出 アクセント情報の有無と提示順序に関する検討、外国語発音習得研究会第 6 回研究集会、2016 年 12 月 23 日、広島修道大学(広島県広島市)

金村久美、ベトナム人日本語学習者の会話における音声的特徴、外国語発音習得研究会第 6 回研究集会、2016 年 12 月 23 日、広島修道大学(広島県広島市)

中川千恵子、演劇活動における音声教育の可能性、外国語発音習得研究会第 6 回研究集会、2016 年 12 月 23 日、広島修道大学(広島県広島市)

吉田夏也、日本語学習者における語頭上げ音調について、外国語発音習得研究会第 6 回研究集会、2016 年 12 月 23 日、広島修道大学(広島県広島市)

Ryoko Hayashi, Kazuhiro Isomura, Makiko Matsuda, Natsuya Yoshida, Motoko Ueyama、Production and reproduction of Japanese pitch-accent by German, Italian, Vietnamese and Swahili speakers、5th Joint Meeting Acoustical Society of America and Acoustical Society of Japan、2016 年 12 月 1 日、ホノルル(米国)

王睿来、中国語母語話者の日本語名詞アクセントの産出: アクセント核の情報とモデル音声の有無による影響に着目して、第 11 回国際日本語教育・日本研究シンポジウム、2016 年 11 月 19 日、香港(中国)

王睿来・林良子・磯村一弘、中国語を母語とする日本語学習者によるアクセントの知覚: 学習歴とアクセント知識の影響による検討、第七回中日韓日本語文化研究国際フォーラム、2016 年 9 月 25 日、大連(中国)

王睿来・林良子・磯村一弘・新井潤、中国語母語話者による日本語名詞アクセントの

産出 知覚・知識との関係に着目して、2016(平成28)年度第30回日本音声学会全国大会、2016年9月18日、早稲田大学(東京都)

磯村一弘・松田真希子・ユパカー=フクシマ、タイ語話者およびベトナム語話者による日本語アクセントの実現 アクセント記号の効果に着目して、2016パリICJLE(日本語教育国際大会)、2016年9月10日、ヌサドゥア(インドネシア)

阿部新・磯村一弘・中川千恵子・林良子・松田真希子、欧州における日本語音声教育事情 - 教師を対象としたアンケートの結果から -、第20回AJEヨーロッパ日本語教育シンポジウム、2016年7月8日、ヴェネツィア(イタリア)

磯村一弘・阿部新・林良子・柴田智子・峯松信明、日本語音声教育の現状と課題 アクセントの教育を中心に、2016年度日本語教育学会春季大会、2016年5月21日、目白大学(東京都新宿区)

柴田智子、発音自律学習の促進とテクノロジー、AATJ(全米日本語教育学会)年次大会、2016年3月31日、シアトル(米国)

林良子、イタリア語母語話者の日本語の話し方-研究調査のお願い、ベネチア・カ・フォスカリ大学講演会、2016年3月7日、ベネチア(イタリア)

磯村一弘、音声を学ぶ、福井県国際交流協会日本語ボランティア養成専門講座、2016年3月6日、福井県国際交流嶺南センター(兵庫県敦賀市)

中川千恵子・磯村一弘・林良子、発音の評価と学習/指導方法 自律した学習者を目指して、第21回メキシコ日本語教育シンポジウム、2016年3月5日、メキシコシティ(メキシコ)

金村久美・中川千恵子・磯村一弘・林良子、活動型授業における音声評価ルーブリックの作成の試み、第19回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム、2015年8月28日、ボルドー(フランス)

阿部新・松田真希子・磯村一弘、ラテンアメリカにおける日本語音声教育事情、国際語としての日本語に関する国際シンポジウム、2015年8月13日、サンパウロ(ブラジル)

中川千恵子・磯村一弘・林良子、スペイン語母語学習者による日本語アクセントの実現と評価、国際語としての日本語に関する国際シンポジウム、2015年8月12日、サンパウロ(ブラジル)

磯村一弘、音声分析ソフトPRAATを用いた日本語韻律指導の実践、"The 6th International Conference on Computer Assisted Systems for Teaching & Learning Japanese (CASTEL/J)"、2015年8月7日、ホノルル(米国)

②柴田智子、Speak Everywhereを使った自律的発音学習、"The 6th International Conference on Computer Assisted Systems

for Teaching & Learning Japanese (CASTEL/J)"、2015年8月8日、ホノルル(米国)

②中川千恵子、日本語の韻律研究と指導法のこれまでとこれから-実践例を挙げながら-、研究集会「日本語音声コミュニケーション研究のこれまでとこれから」、2015年3月21日、神戸大学(兵庫県神戸市)

③王睿来・青山恭子・山本弥生・林良子、中国語声調の知識と知覚の関係 日本人高校生を対象として、研究集会「日本語音声コミュニケーション研究のこれまでとこれから」、2015年3月21日、神戸大学(兵庫県神戸市)

④金村久美、日本語文イントネーション指導のシラバスと実践例、研究集会「日本語音声コミュニケーション研究のこれまでとこれから」、2015年3月21日、神戸大学(兵庫県神戸市)

⑤松田真希子、パラ言語としての文字音声コミュニケーション、研究集会「日本語音声コミュニケーション研究のこれまでとこれから」、2015年3月21日、神戸大学(兵庫県神戸市)

⑥波多野博顕・宋晨超・多胡夏純・松田真希子・石井カルロス寿憲、日本語・中国語母語話者による日本語朗読音声の文節型アクセント判定方法の検討、研究集会「日本語音声コミュニケーション研究のこれまでとこれから」、2015年3月21日、神戸大学(兵庫県神戸市)

⑦阿栄娜・林良子、日本語学習者によるアクセントの意識化を伴う発音訓練の効果、研究集会「日本語音声コミュニケーション研究のこれまでとこれから」、2015年3月21日、神戸大学(兵庫県神戸市)

⑧林良子、ドイツ語話者に日本語音声を教える、オーストリア日本語教師会第41回定例会、2015年3月14日、ウィーン(オーストリア)

⑨磯村一弘、日本語教師のための音声指導入門、日本音声学会2014年度音声学入門講座、2014年12月13日、甲南大学(兵庫県神戸市)

⑩金村久美、日本語とベトナム語の文の韻律の比較、東京音声研究会、2014年11月8日、早稲田大学(東京都新宿区)

⑪林良子・吉田夏也・磯村一弘・上山素子、スワヒリ語・イタリア語・ドイツ語を母語とする日本語学習者による語アクセントの生成、日本音響学会2014年秋季研究発表会、2014年9月5日、北海学園大学(北海道札幌市)

⑫波多野博顕・石井カルロス寿憲・松田真希子、日本語朗読音声を対象にしたアクセント型自動判定方法の検討、日本音響学会2014年秋季研究発表会、2014年9月4日、北海学園大学(北海道札幌市)

⑬中川千恵子・中山由佳、演劇プロジェクト授業における音声指導を通じた文化の学び、

第18回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム、2014年8月29日、リュブリャナ(スロヴェニア)

③④松田真希子、多様化する学習者への取り組み ベトナム編2、平成26年度日本語学校教育研究大会、2014年8月5日、国立青少年オリンピックセンター(東京都渋谷区)

③⑤多胡夏純・磯村一弘、海外における音声教育の現状と課題 中国、北米における訂正フィードバック実施状況に基づく考察、ICJLE シドニー日本語教育国際研究大会、2014年7月11日、シドニー(オーストラリア)

③⑥金村久美・今川博・榊原健一、ベトナム語と日本語音声における喉頭調節、日本音声学会第329回研究例会、2014年6月21日、神戸大学(兵庫県神戸市)

③⑦Ryoko Hayashi、Prosodic correlates of “characters” - focused on the utterance by L2 learners of Japanese and its acquisition、International Conference: Context-based Spoken Japanese Language、2014年4月4日、ポルドー(フランス)

③⑧吉田夏也・林良子・磯村一弘、学習者の日本語の語アクセントと発音の特徴 スワヒリ語・イタリア語話者によるデータを中心に、第4回外国語発音習得研究会、2014年3月21日、名古屋大学(愛知県名古屋市)

③⑨金村久美・榊原健一・今川博、ベトナム語と日本語の音声における喉頭調節と音声習得上の問題点、第4回外国語発音習得研究会、2014年3月21日、名古屋大学(愛知県名古屋市)

④⑩松田真希子、実践報告・討論会「アニメ・ドラマを用いた日本語音声指導の可能性」日本の教育機関における実践 金沢大学における音声コミュニケーション指導、第4回外国語発音習得研究会、2014年3月21日、名古屋大学(愛知県名古屋市)

④⑪柴田智子、実践報告・討論会「アニメ・ドラマを用いた日本語音声指導の可能性」海外の教育機関における実践 プリンストン大学における韻律指導を中心に、第4回外国語発音習得研究会、2014年3月21日、名古屋大学(愛知県名古屋市)

④⑫林良子・磯村一弘、ドイツ語を母語とする日本語学習者の韻律の特徴とその習得、第20回ドイツ語圏大学日本語教育研究会シンポジウム、2014年3月1日、ボン(ドイツ)

④⑬呉麗楠・波多野博頭・金村久美・松田真希子、JFL 中国人日本語学習者の発音学習ストラテジーと発音習得の関係について、第27回日本音声学会全国大会、2013年9月28日、金沢大学(石川県金沢市)

④⑭磯村一弘、アフリカ地域における日本語音声教育事情調査および学習者データの収集、第一回東アフリカ日本語教育会議、2013年7月13日、ナイロビ(ケニア)

〔図書〕(計3件)

松田真希子、ベトナム語母語話者のための日本語教育、春風社、2016年3月1日、299
中川千恵子・木原郁子・赤木浩文・篠原亜紀、にほんご話し方トレーニング、アスク出版社、2015年2月28日、103

阿部新(岸江信介・田畑智司編)、テキストマイニングによる言語研究、ひつじ書房、2014年12月3日、212

〔その他〕
ホームページ等
<http://hatsuon.org/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

磯村 一弘 (ISOMURA, Kazuhiro)

政策研究大学院大学・政策研究科・非常勤講師

研究者番号：00401729

(2) 研究分担者

松田 真紀子 (MATSUDA, Makiko)

金沢大学・国際機構・准教授

研究者番号：10361932

林 良子 (HAYASHI, Ryoko)

神戸大学・国際文化学研究所・教授

研究者番号：20347785

金村 久美 (KANAMURA, Kumi)

名古屋経済大学・経営学部・准教授

研究者番号：20424955

(3) 連携研究者

吉田 夏也 (YOSHIDA, Natsuya)

国立国語研究所・理論構造研究系・非常勤研究員

研究者番号：60316320

金田 順平 (KANEDA, Junpei)

国立民族学博物館・研究員

研究者番号：10511975

(4) 研究協力者

阿部 新 (ABE, Shin)

柴田 智子 (SHIBATA, Tomoko)

中川 千恵子 (NAKAGAWA, Chieko)

ナヨアン・フランキー (NAJOAN, Franky Raymond)

ユパカー・フクシマ (FUKUSHIMA, Yupaka)

ファム・トゥー・フォン (PHAM, Thuo Huong)

王 睿来 (WANG, Ruilai)

多胡 夏純 (TAGO, Kasumi)

波多野 博頭 (HATANO, Hiroaki)

阿栄娜 (ARONGNA)

呉 麗楠 (WU, Linan)